剛基盤上の非線形弾性層内を伝播する非線形 SH 波について

 \mathcal{U}_{3}

1. はじめに

1983年日本海中部地震の際,北海道某所で奇妙な地 震波が観測された.その形状は,紡錘状の包絡線の中 に正弦波が閉じ込められたようであり,当時物理学の 分野で盛んに研究されていた非線形波動の一形態であ る包絡ソリトンのように見えた.何か新しい発見をし たような気がして,機会があればぜひ研究してみたい と思ったが,本務に忙殺され,長い間放置していた.

最近, Teymur ら¹⁾によって2層地盤における非線形 SH 波の伝播問題が研究されていたことを知った.彼 らは,剛な基盤上に堆積した均質で等方的な非線形弾 性層を想定し,その中を伝播する非線形 SH 波を考え た.そして,摂動法を用いることにより,非線形性と 分散性の釣り合いから,波の非線形自己変調を表す非 線形 Schrödinger方程式(NLS 方程式)が導かれること を示した.そこで,本稿では,はじめに Teymur ら¹⁾ に基いて NLS 方程式の導出を行った.最後に,北海道 で観測された地震波への適用性について言及した.

2. 問題の定式化

物体の運動と変形を物質座標 (X_1, X_2, X_3) と空間座 標 (x_1, x_2, x_3) で表す. ここで, $X_2=0$ と $X_2=h$ に挟まれ た一様厚さhの層を考える. $X_2=h$ は自由表面であり, $X_2=0$ は剛な境界である. X_3 方向に変位し, X_1 方向に伝 播する SH 波の運動は次式のように表される.

$$x_{k} = X_{K}\delta_{kK} + u_{3}(X_{1}, X_{2}, t)\delta_{k3}$$
(1)

ここに, u_3 は X_3 方向の変位, t は時間, δ_{kK} , δ_{k3} はクロ ネッカーのデルタである. なお, 大文字の添字は物質座 標を表し, 小文字の添字は空間座標を表す. 応力の釣合 式はつぎのようである.

$$\frac{\partial T_{11}}{\partial X_1} + \frac{\partial T_{21}}{\partial X_2} + \frac{\partial T_{31}}{\partial X_3} = 0$$

$$\frac{\partial T_{12}}{\partial X_1} + \frac{\partial T_{22}}{\partial X_2} + \frac{\partial T_{32}}{\partial X_3} = 0$$

$$\frac{\partial T_{13}}{\partial X_1} + \frac{\partial T_{23}}{\partial X_2} + \frac{\partial T_{33}}{\partial X_3} = \rho \frac{\partial^2 u_3}{\partial t^2}$$

$$\exists C = C, \ T_{ii} \ t \ X_i \ m \in \ell \pi \ J^{+} \ S \ X_i \ J^{-} \ J^{-}$$

であり、ho は地盤材料の密度である.

Y 数理工学研究所 正会員 吉田 隆千代

自由表面では応力が0であり、剛境界では変位が0で あるから、それぞれの境界における境界条件はつぎの ように与えられる.

$$T_{2k} = 0 \quad on \quad X_2 = h \tag{3}$$

$$= 0 \quad on \quad X_2 = 0 \tag{4}$$

層の構成材料が均質で等方的な非線形弾性体であると すると、材料の応力構成式はつぎのように表される.

$$T_{Kk} = \left(\frac{\partial \Sigma}{\partial I_1} \delta_{LK} + 2\frac{\partial \Sigma}{\partial I_2} E_{LK} + 3\frac{\partial \Sigma}{\partial I_3} E_{LM} E_{MK}\right) \frac{\partial x_k}{\partial X_L}$$
(5)

ここに, $E = E_{IJ}$ は Green-Lagrange ひずみテンソルである. Σ はひずみエネルギー関数であり,等方性材料ではつぎに示す*E* の不変量の関数になる.

$$I_1 = trE$$
, $I_2 = trE^2$, $I_3 = trE^3$ (6)

(1)の変形場では Eの不変量は下式のように表される.

$$I_{1} = Q/2, \quad I_{2} = Q(1+Q/2)/2, \quad I_{3} = Q^{2}(3+Q)/8$$
(7)
$$C \subset VC, \qquad Q = \left(\frac{\partial u_{3}}{\partial u_{3}}\right)^{2} + \left(\frac{\partial u_{3}}{\partial u_{3}}\right)^{2}$$
(8)

$$Q = \left(\frac{\partial X_3}{\partial X_1}\right) + \left(\frac{\partial X_3}{\partial X_2}\right) \tag{8}$$

である.これらを用いると(5)はつぎのようになる.

$$T_{\Delta\beta} = \left[\frac{\partial \Sigma}{\partial I_1} \delta_{\Omega\Delta} + \left(\frac{\partial \Sigma}{\partial I_2} + \frac{3}{4} (1+Q) \frac{\partial \Sigma}{\partial I_3} \right) \frac{\partial u_3}{\partial X_{\Omega}} \frac{\partial u_3}{\partial X_{\Delta}} \right] \delta_{\beta\Omega}$$

$$T_{\Delta3} = 2 \frac{\partial \Sigma}{\partial Q} \frac{\partial u_3}{\partial X_{\Delta}}, \quad T_{3\alpha} = -\frac{\partial u_3}{\partial X_{\Delta}} T_{\Delta\alpha} + \delta_{\alpha\Delta} T_{\Delta3}$$

$$T_{33} = \frac{\partial \Sigma}{\partial I_1} + \left(\frac{\partial \Sigma}{\partial I_2} + \frac{3}{4} (1+Q) \frac{\partial \Sigma}{\partial I_3} \right) Q \tag{9}$$

ここに、ギリシャ文字の添字は(1,2)を表す. つぎに、ひずみエネルギー関数 $\Sigma \in E$ の不変量 I_i を用いて4次多項式に展開する.

$$\Sigma = \alpha_1 I_1^2 + \alpha_2 I_2 + \alpha_3 I_1^3 + \alpha_4 I_1 I_2 + \alpha_5 I_3 + \alpha_6 I_1^4 + \alpha_7 I_1^2 I_2 + \alpha_8 I_1 I_3 + \alpha_9 I_2^2$$
(10)

ここに、 $\alpha_1 = \lambda/2, \alpha_2 = \mu$ は2次の(λ, μ はラメの 定数)、 $\alpha_3, \alpha_4, \alpha_5$ は3次の、 $\alpha_6, \alpha_7, \alpha_8, \alpha_9$ は4次の 弾性定数である、3次と4次の弾性定数は非線形弾性特 性を表す、ひずみエネルギー関数Σは、不変量が(7)で 与えられるならば次式を満足しなければならない、

$$\frac{\partial \Sigma}{\partial I_1} = 0 \quad , \quad \frac{\partial \Sigma}{\partial I_2} + \frac{3}{4} \left(1 + Q \right) \frac{\partial \Sigma}{\partial I_3} = 0 \tag{11}$$

キーワード 非線形 SH 波, 非線形 Schrödinger 方程式, 非線形自己変調, 摂動法, 多重スケール法, 包絡ソリトン 連絡先 〒733-0035 広島市西区南観音 7 丁目 3 番 1-401 号 TEL (082) 295-1911

(10)を(9)に代入し(11)を適用すると(2)の3番目の式 はつぎのようになる.

$$\frac{\partial^2 u_3}{\partial t^2} - c_T^2 \left(\frac{\partial^2 u_3}{\partial X_1^2} + \frac{\partial^2 u_3}{\partial X_2^2} \right) = n_T \left[\frac{\partial}{\partial X_1} \left(\frac{\partial u_3}{\partial X_1} Q \right) + \frac{\partial}{\partial X_2} \left(\frac{\partial u_3}{\partial X_2} Q \right) \right]$$
(12)

ここに、 c_T はせん断波速度($c_T^2 = \mu/\rho$)である.また、 n_T は非線形材料定数であり、地盤材料の非線形特性を 表す. $n_T > 0$ のとき地盤材料はせん断硬化性を示し、 $n_T < 0$ のときせん断軟化性を示す.

ここで、 $X = X_1, Y = X_2, u = u_3$ と置く. 変形勾配の中 に 3 次以上の項を含まない近似支配方程式と境界条件 はつぎのように表される.

$$\frac{\partial^2 u}{\partial t^2} - c_T^2 \left(\frac{\partial^2 u}{\partial X^2} + \frac{\partial^2 u}{\partial Y^2} \right) = n_T \left[\frac{\partial}{\partial X} \left(\frac{\partial u}{\partial X} Q(u) \right) + \frac{\partial}{\partial Y} \left(\frac{\partial u}{\partial Y} Q(u) \right) \right] (13)$$

$$\frac{\partial u}{\partial Y} \left(1 + \frac{n_T}{c_T^2} Q(u) \right) = 0 \quad on \quad Y = h$$
⁽¹⁴⁾

 $u = 0 \qquad on \quad Y = 0 \tag{15}$

3. 非線形 SH 波の漸近解析

非線形 SH 波の緩やかに変動する振幅が,非線形自己 相互作用によってどのように変調していくかについて, 摂動法を用いて調べる.X,Y,tの代わりに多重スケー ル法に基づく以下の新しい変数を導入する.

$$x_i = \varepsilon^i X, \quad t_i = \varepsilon^i t, \quad y = Y \quad (i = 0, 1, 2, \cdots)$$
 (16)

ここに、 $\varepsilon > 0$ は微小パラメータである. $\{x_0, t_0, y\}$ は、 速い変動を表す変数である. $\{x_1, x_2, \dots, t_1, t_2, \dots\}$ は、緩 やかな変動を表す変数である(以下、ゆっくり変数とよ ぶ). いま、uをこれらの新しい変数の関数とみなし、 ε に関するつぎのような漸近級数に展開する.

$$u = \sum_{n=1}^{\infty} \varepsilon^n u_n (x_0, x_1, x_2, \dots, y, t_0, t_1, t_2, \dots)$$
(17)

ここでは、1 次の漸近解を得ることを目的とする.した がって、 u_n は $\{x_1, x_2, t_1, t_2\}$ のみに依存すると仮定する. はじめに、(13)の運動方程式と、(14)(15)の境界条件を 新しい変数で記述する.つぎに、それらに(17)を代入し、 ε の同じ冪の項を集める.なお、Xとtの微分に関する 多重スケールへの変換はつぎのようである.

$$\frac{\partial}{\partial X} = \sum_{n=0}^{2} \varepsilon^{n} \frac{\partial}{\partial x_{n}}, \quad \frac{\partial}{\partial t} = \sum_{n=0}^{2} \varepsilon^{n} \frac{\partial}{\partial t_{n}}$$
(18)

€の3次の項までは以下のように表される.

$$D(\varepsilon^{1}): Lu_{1} \equiv \frac{\partial^{2} u_{1}}{\partial t_{0}^{2}} - c_{T}^{2} \left(\frac{\partial^{2} u_{1}}{\partial x_{0}^{2}} + \frac{\partial^{2} u_{1}}{\partial y^{2}} \right) = 0$$
(19)

$$\frac{\partial u_1}{\partial y} = 0 \qquad on \quad y = h \tag{20}$$

$$u_1 = 0 \quad on \quad y = 0 \tag{21}$$

 $O(\varepsilon^2)$:

$$Lu_{2} = 2 \left(c_{T}^{2} \frac{\partial^{2} u_{1}}{\partial x_{0} \partial x_{1}} - \frac{\partial^{2} u_{1}}{\partial t_{0} \partial t_{1}} \right)$$
(22)

$$\frac{\partial u_2}{\partial y} = 0 \qquad on \quad y = h \tag{23}$$

$$u_2 = 0 \qquad on \quad y = 0 \tag{24}$$

$$D(\varepsilon^{3}): Lu_{3} = 2\left(c_{T}^{2} \frac{\partial^{2} u_{2}}{\partial x_{0} \partial x_{1}} - \frac{\partial^{2} u_{2}}{\partial t_{0} \partial t_{1}}\right) + c_{T}^{2}\left(\frac{\partial^{2} u_{1}}{\partial x_{1}^{2}} + 2\frac{\partial^{2} u_{1}}{\partial x_{0} \partial x_{2}}\right) - \frac{\partial^{2} u_{1}}{\partial t_{1}^{2}} - 2\frac{\partial^{2} u_{1}}{\partial t_{0} \partial t_{2}} + n_{T}\left[\frac{\partial}{\partial x_{0}}\left(\frac{\partial u_{1}}{\partial x_{0}}K(u_{1})\right) + \frac{\partial}{\partial y}\left(\frac{\partial u_{1}}{\partial y}K(u_{1})\right)\right]$$
(25)

$$\frac{\partial u_3}{\partial y} + \frac{n_T}{c_T^2} K(u_1) \frac{\partial u_1}{\partial y} = 0 \quad on \quad y = h$$
(26)

$$u_3 = 0 \qquad on \quad y = 0 \tag{27}$$

ここに,

$$K(u_1) = \left(\frac{\partial u_1}{\partial x_0}\right)^2 + \left(\frac{\partial u_1}{\partial y}\right)^2$$
(28)

摂動問題は各ステップ内では線形である.ここで(19) について考える.層内に SH 波が存在するためには,位 相速度 c は,つぎの不等式を満足しなければならない.

C>C_T
 (29)
 ここでは、SH 波の位相速度は上記の不等式を満足する
 と仮定する.変数分離法を用いると(19)の解はつぎの
 ようになる.

$$u_{1} = \left\{ A_{1}(x_{1}, x_{2}, t_{1}, t_{2}) e^{ikpy} + B_{1}(x_{1}, x_{2}, t_{1}, t_{2}) e^{-ikpy} \right\} e^{i\phi} + c.c.$$
(30)

$$p = \left(c^2 / c_T^2 - 1\right)^{W^2} , \quad \phi = kx_0 - \omega t_0$$
(31)

ここに、 A_1 , B_1 はゆっくり変数の1次振幅関数である. また、kは波数、 ω は角周波数、C.Cは複素共役を表す. (30)を境界条件(20)(21)に代入すると次式が得られる. $WU_1 = \{0\}$ (32)

$$\Xi \subseteq i \mathbb{Z},$$

$$W = \begin{bmatrix} i k p e^{i k p h} & -i k p e^{-i k p h} \\ 1 & 1 \end{bmatrix}$$

$$U_1 = \begin{cases} A_1 \\ B_1 \end{cases}$$
(33)
(34)

Wは分散マトリクスであり、U1は1次振幅ベクトル である. det *W* = 0 は線形 SH 波の分散関係を与える. (\cdot, \cdot) 35)

$$\cos(kph) = 0 \tag{35}$$

(35)から次式が得られる.

$$kph = (2n-1)\frac{\pi}{2}$$
 (n = 1,2,...) (36)

nは分散関係のモード次数である. (36)はつぎのよう に表される.

$$\frac{c^2}{c_T^2} = 1 + \left[\frac{(2n-1)\pi}{2kh}\right]^2, \quad \omega^2 = k^2 c_T^2 \left\{ 1 + \left[\frac{(2n-1)\pi}{2kh}\right]^2 \right\} (37)$$

(32)の解はつぎのように表される.

$$U_1 = A_1(x_1, x_2, t_1, t_2)R$$
(38)

R はベクトルであり次式を満足する.

$$WR = \{0\} \tag{39}$$

$$R = \begin{cases} R_1 \\ R_2 \end{cases} = \begin{cases} 1 \\ e^{2ikph} \end{cases}$$
(40)

1次解はつぎのように与えられる.

 $u_1 = A_1(x_1, x_2, t_1, t_2) [2i\sin(kpy)] e^{i\phi} + c.c. \quad (41)$ (41)と線形 SH 波解は同じ形をしているようにみえる. しかし,線形 SH 波解の振幅が定数であるのに対し, (41)の振幅は非線形自己変調を表す緩やかに変動する 関数である.この点において両者は異なっている.非線 形 SH 波の1次解を完成するには、A」が決定されなけれ ばならない. そのためにはより高次の摂動問題を調べ る必要がある. (41)を(22)に代入すると,2次の摂動問 題ができる.

$$Lu_{2} = 2i \left(\omega \frac{\partial A_{1}}{\partial t_{1}} + kc_{T}^{2} \frac{\partial A_{1}}{\partial x_{1}} \right) \left(e^{ikpy} + e^{ikp(2h-y)} \right) e^{i\phi} + c.c.$$
⁽⁴²⁾

(42)の解をつぎのように分解する.

$$u_2 = u_2 + u_2 \tag{43}$$

 u_2 は非同次方程式(42)の特解である. \widetilde{u}_2 はつぎの同次 方程式の解である.

$$L\tilde{u}_2 = 0 \tag{44}$$

$$\frac{\partial \tilde{u}_2}{\partial y} = -\frac{\partial \bar{u}_2}{\partial y} \quad on \quad y = h \tag{45}$$

$$\tilde{u}_2 = -\bar{u}_2 \qquad on \quad y = 0 \tag{46}$$

非同次方程式(42)の特解は未定係数法によりつぎのよ うに得られる.

$$\overline{u}_{2} = \frac{1}{kpc_{T}^{2}} \left(\omega \frac{\partial A_{1}}{\partial t_{1}} + kc_{T}^{2} \frac{\partial A_{1}}{\partial x_{1}} \right) \left(-e^{ikpy} + e^{ikp(2h-y)} \right) y e^{i\phi} + c.c.$$
(47)

(44)の解は1次問題と同様につぎのように書ける.

$$\widetilde{u}_{2} = \left\{ A_{2}(x_{1}, x_{2}, t_{1}, t_{2}) e^{ikpy} + B_{2}(x_{1}, x_{2}, t_{1}, t_{2}) e^{-ikpy} \right\} e^{i\phi} + c.c.$$
(48)

ここに, A_2 , B_2 はゆっくり変数の2次振幅関数である. (47)(48)を(45)(46)の境界条件に代入すると次式が得 られる.

$$WU_2 = b_2 \tag{49}$$

$$b_{2} = \begin{cases} \frac{2ih}{c_{T}^{2}} \left(\omega \frac{\partial A_{1}}{\partial t_{1}} + kc_{T}^{2} \frac{\partial A_{1}}{\partial x_{1}} \right) e^{ikph} \\ 0 \end{cases}$$

$$b_{T} t_{T} \supset \vec{x} \otimes t_{T} \supset \vec{x} \Rightarrow h \neq 0 \end{cases}$$

$$(51)$$

$$b_{2} = -i \left[\frac{\partial A_{1}}{\partial t_{1}} \frac{\partial W}{\partial \omega} - \frac{\partial A_{1}}{\partial x_{1}} \frac{\partial W}{\partial k} \right] R$$
(52)

det W = 0 かつ, $b_2 \neq \{0\}$ であるので, (49)が U_2 に ついて解けるためには、つぎの条件を満足しなければ ならない.

$$\boldsymbol{M}^{T}\boldsymbol{b}_{2} = \boldsymbol{0} \tag{53}$$

M はつぎのように定義される.

$$\boldsymbol{M}^{T}\boldsymbol{W} = \left\{\boldsymbol{0}\right\}^{T} \tag{54}$$

(54)より、

$$M = \begin{cases} M_1 \\ M_2 \end{cases} = \begin{cases} i \\ kpe^{ikph} \end{cases}$$
(55)

(53)から次式が得られる.

$$\frac{\partial A_1}{\partial t_1} + V_g \frac{\partial A_1}{\partial x_1} = 0 \tag{56}$$

ここに、 V_g は群速度である.

$$V_g = \frac{d\omega}{dk} = -\left(M^T \frac{\partial W}{\partial k}R\right) / \left(M^T \frac{\partial W}{\partial \omega}R\right)$$
(57)

(56)はつぎのことを示している.1次振幅関数 A1 は群 速度 V_gとともに移動する座標系の中では一定である. すなわち, $A_1 = A_1(x_1 - V_s t_1, x_2, t_2)$ である. U_2 はつぎ のように表される.

$$U_{2} = A_{2}R - i\frac{\partial A_{1}}{\partial x_{1}} \left(\frac{\partial R}{\partial k} + V_{g}\frac{\partial R}{\partial \omega}\right)$$
(58)

ここでは1次解を得ることを目的としており、そのた めには A_2 が明示的に計算される必要はなく, A_1 の決定 で十分である.そこで,以下では A,を省略する.1次 解と2次解を(25)に代入すると次式が得られる.

$$Lu_{3} = \left[(C_{1} + C_{2}y)e^{ikpy} + (C_{3} + C_{4}y)e^{-ikpy} + C_{5}e^{3ikpy} + C_{6}e^{-3ikpy} \right]e^{i\phi} + c.c. + terms \quad in(e^{\pm 3i\phi})$$
(59)

$$C_{1} = 2i \left(\omega \frac{\partial A_{1}}{\partial t_{2}} + kc_{T}^{2} \frac{\partial A_{1}}{\partial x_{2}} \right) + c_{T}^{2} \frac{\partial^{2} A_{1}}{\partial x_{1}^{2}} - \frac{\partial^{2} A_{1}}{\partial t_{1}^{2}} - n_{T} k^{4} \left(9p^{4} + 2p^{2} + 9 \right) |A_{1}|^{2} A_{1}$$

$$C_{2} = -\frac{2i}{kpc_{T}^{2}} \left(\omega^{2} \frac{\partial^{2} A_{1}}{\partial t_{1}^{2}} + 2\omega kc_{T}^{2} \frac{\partial^{2} A_{1}}{\partial t_{1} \partial x_{1}} + k^{2} c_{T}^{4} \frac{\partial^{2} A_{1}}{\partial x_{1}^{2}} \right)$$

$$C_{3} = C_{1} e^{2ikph}, \quad C_{4} = -C_{2} e^{2ikph}$$

$$C_{5} = n_{T} k^{4} \left(9p^{4} - 2p^{2} - 3 \right) e^{-2ikph} |A_{1}|^{2} A_{1}$$

$$C_{6} = n_{T} k^{4} \left(9p^{4} - 2p^{2} - 3 \right) e^{4ikph} |A_{1}|^{2} A_{1}$$
(60)

右辺最終項は 3 次の搬送波 $e^{\pm 3i\phi}$ に比例する項である. u_3 をつぎのように分解する.

$$u_3 = \overline{u}_3 + \widetilde{u}_3 \tag{61}$$

ここに, \bar{u}_3 は(59)の特解であり, \tilde{u}_3 はつぎの同次方程 式の解である.

$$L\tilde{u}_3 = 0 \tag{62}$$

$$\frac{\partial \widetilde{u}_{3}}{\partial y} = -\frac{\partial \overline{u}_{3}}{\partial y} - \frac{n_{T}}{c_{T}^{2}} K(u_{1}) \frac{\partial u_{1}}{\partial y} \quad on \quad y = h \quad (63)$$

$$\widetilde{u}_3 = -\overline{u}_3 \qquad on \quad y = 0 \tag{64}$$

(59)の特解は未定係数法によりつぎのように得られる.

$$\overline{u}_{3} = (D_{1} + D_{2} y) y e^{ikpy} + (D_{3} + D_{4} y) y e^{-ikpy} + D_{5} e^{3ikpy} + D_{6} e^{-3ikpy}$$
(65)

$$\begin{split} & C_{1} = \frac{iC_{1}}{2kpc_{T}^{2}} - \frac{C_{2}}{4k^{2}p^{2}c_{T}^{2}}, \quad D_{2} = \frac{iC_{2}}{4kpc_{T}^{2}} \\ & D_{3} = -\frac{iC_{3}}{2kpc_{T}^{2}} - \frac{C_{4}}{4k^{2}p^{2}c_{T}^{2}}, \quad D_{4} = -\frac{iC_{4}}{4kpc_{T}^{2}} \\ & D_{5} = \frac{C_{5}}{8k^{2}p^{2}c_{T}^{2}}, \quad D_{6} = \frac{C_{6}}{8k^{2}p^{2}c_{T}^{2}} \\ & (62) \ \mathcal{O} \not H(1 \ \mathcal{O} \not S) \ \mathcal{L} \ \mathcal{I} \ \mathcal{L} \not S \not S \not L \ \mathcal{I} \ \mathcal{L} \not S \not S \not L \ \mathcal{I} \ \mathcal{L} \\ & \widetilde{u}_{3} = \left\{ A_{3}(x_{1}, x_{2}, t_{1}, t_{2}) e^{ikpy} + B_{3}(x_{1}, x_{2}, t_{1}, t_{2}) e^{-ikpy} \right\} e^{i\phi} \\ & + c.c. \end{split}$$

ここに, A_3 , B_3 はゆっくり変数の3次振幅関数である. u_1, u_2, \overline{u}_3 と境界条件(63)(64)を用いると次式が得られる.

$$WU_3 = b_3 \tag{68}$$

$$U_{3} = \begin{cases} A_{3} \\ B_{3} \end{cases}$$
(69)

$$b_{3} (\ddagger) \notin 0 \ddagger j (: \notin \Lambda \land \delta)$$

$$b_{3} = -i \left(\frac{\partial W}{\partial \omega} \frac{\partial A_{1}}{\partial t_{2}} - \frac{\partial W}{\partial k} \frac{\partial A_{1}}{\partial x_{2}} \right) R$$

$$+ \frac{1}{2} \left(\frac{\partial^{2} W}{\partial \omega^{2}} \frac{\partial^{2} A_{1}}{\partial t_{1}^{2}} - 2 \frac{\partial^{2} W}{\partial \omega \partial k} \frac{\partial^{2} A_{1}}{\partial x_{1} \partial t_{1}} + \frac{\partial^{2} W}{\partial k^{2}} \frac{\partial^{2} A_{1}}{\partial x_{1}^{2}} \right) R$$

$$+ \left(\frac{\partial W}{\partial k} \frac{\partial^{2} A_{1}}{\partial x_{1}^{2}} - \frac{\partial W}{\partial \omega} \frac{\partial^{2} A_{1}}{\partial x_{1} \partial t_{1}} \right) \left(\frac{\partial R}{\partial k} + V_{g} \frac{\partial R}{\partial \omega} \right) + F |A_{1}|^{2} A_{1}$$

$$(70)$$

ベクトル*F*の成分はつぎのとおりである. $F_1 = -i \frac{n_T k^4 h}{c_T^2} (9p^4 + 2p^2 + 9) \sin(kph), F_2 = 0$ (71) det W = 0 かつ, $b_3 \neq \{0\}$ であるので, (68) が U_3 に ついて解けるためには, つぎの条件を満足しなければ ならない.

$$\boldsymbol{M}^{T}\boldsymbol{b}_{3} = \boldsymbol{0} \tag{72}$$

(72)から次式が得られる.

$$i\left(\frac{\partial A_1}{\partial t_2} + V_g \frac{\partial A_1}{\partial x_2}\right) + \tilde{\Gamma} \frac{\partial^2 A_1}{\partial x_1^2} + \tilde{\Delta} |A_1|^2 A_1 = 0$$
(73)

$$\widetilde{\Gamma} = \frac{1}{2} \frac{dV_g}{dk} = \frac{1}{2} \frac{d^2 \omega}{dk^2}, \quad \widetilde{\Delta} = -M^T F / \left(M^T \frac{\partial W}{\partial \omega} R \right) \quad (74)$$

$$\tau = \omega t_2, \quad \xi = k \Big(x_1 - V_g t_1 \Big), \quad A = k A_1$$

$$\Gamma = k^2 \widetilde{\Gamma} / \omega, \quad \Delta = \widetilde{\Delta} / \big(\omega k^2 \big)$$
(75)

(73)は,標準 NLS 方程式としてつぎのように表される.

$$i\frac{\partial A}{\partial \tau} + \Gamma \frac{\partial^2 A}{\partial \xi^2} + \Delta |A|^2 A = 0$$
(76)

(74)(75)から次式が得られる.

 $\Gamma\Delta = -n_T p^2 c_T^4 (9p^4 + 2p^2 + 9) / (4c^6)$ (77)

NLS 方程式の解は、 $\Gamma \Delta$ の符号に強く影響される. 包絡 ソリトンは $\Gamma \Delta > 0$ を満足するとき存在する. (77)で $n_T < 0$ であれば、すなわち層がせん断軟化材料で構成 されているならば、すべての位相速度 $c > c_T$ に対して $\Gamma \Delta > 0$ である. $A = \varphi(\xi) e^{-i\Omega \tau}$ として (76)から導出 される解は次式のように表される.

$$A(\xi,\tau) = \varphi_0 \sec h\left(\sqrt{\Delta/2\Gamma}\varphi_0\xi\right) e^{i\Delta\varphi_0^2\tau/2}$$
(78)

$$\Xi \subseteq \xi \xi,$$

$$\varphi_0 = \sqrt{-2\Omega/\Delta} \tag{79}$$

(78)は包絡線であり,搬送波 e^{i¢}を乗じて(75)より有次 次元化し(41)に代入すれば変位波形が得られる(図1).



日本海中部地震の際に観測された地震波の形状は, 図1によく似ていた.また,観測点は,硬い岩盤に軟弱 な表層が堆積した地盤上にあり,発生条件に適合して いることから,包絡ソリトンが発生していた可能性が ある.詳細については発表会場にて説明する.

参考文献

 Dilek Demirkus and Mevlut Teymur : Shear horizontal waves in a nonlinear elastic layer overlying a rigid substratum, Hacettepe Journal of Mathematics and Statistics, Vol.46(5), pp.801-815, 2017

- 4 -